

願いをもち、主体的に遊びを追求する子どもをはぐくむ保育

1 保育における「願いをもち、主体的に追求する姿」

昨年度、「広がり」と「深まり」を意識して遊びをとらえ、遊びが広がるときと深まるべきとき、それぞれに有効なはたらきかけや環境の構成を検証してきた。「深まり」に関しては、追求を促すはたらきかけが有効であることが分かってきた。今年度は、子どもらしい子どもなりの願いをもつこと、さらには、子どもが自ら感じ自ら考え遊びをつくっていけるような「主体性」を伸ばしていきたいと考える。将来に渡って意欲的に物事にかかわり、自らの力で主体的に向かっている子どもを育てたいと考えるからである。

「願いをもち、主体的に追求する姿」は、例えば次のようなものである。

6月初旬、教師が砂場の近くに水道管や樋を置くと、子どもたちは「コースを作って水を流したい」という願いをもった。子どもたちが作ったコースの途中には、水が逆流する箇所があったが、多くの子どもたちは、あまり気にせずに遊んでいた。そこで教師は、水が逆流しないようにすることに気持ちを向けている子どもの気付きを周りの子どもに伝えた。すると、他の子どもたちも、「思った方向に水を流すにはどうすればよいか」という疑問をもった。遊びが思い通りにいかなかったことが、追求に向かう疑問をもつきっかけとなったのである。疑問をもったことにより、子どもたちは「水をうまく流したい」という願いをより強くもつことになったであろう。願いを実現しようと、樋の上に砂を置いて水をせき止めたり樋の下に砂を積んで樋の角度を変えたりと、水を流す工夫をし始めた。

さらに、子どもたちは「もっとコースを長くしたい」という新たな願いをもって遊んでいった。コースが長くなるほど水はコースの途中で止まったりつなぎ目の隙間からこぼれたりしてしまう。そのため、子どもたちは、どうすれば水が途中でこぼれないかと考えながら、水道管や樋のつなげ方を変えたりつなぎ目の隙間を砂で埋めたりしていった。コースはだんだんと長くなり、ついには、築山の斜面を利用してコースを長くつなげるようになった。築山に樋を固定する方法や、どうすれば水が漏れなくなるかということなど、子どもたち同士で考えを言い合い、協同して遊びを進めていった。

6月下旬には、「泥団子も転がしてみたい」と、水を流していたコースに泥団子を転がし始めた。泥団子を転がしてしばらくたつと、今度はコースを作る材料を変えて、より遊びを面白くしようと追求していった。

このように、子どもがしっかりと願いをもつことで、主体的に追求する姿が現れるのではないだろうか。願いとは、好奇心や探究心がわき上がってくるような、心を動かすものであると考える。

このことから、保育における「願いをもち、主体的に追求する姿」を次のようにまとめた。

- 気付いたり、考えたり、工夫したり、確かめたりしながら、納得するまで続けていく姿
- 目的や課題意識をもって遊びを広げたり深めたりしようとする姿
- 友だちと目的を共有して、考えを出し合ったり互いの考えのよさを受け入れ合ったりしながら協同する姿

2 「願いをもち、主体的に追求する姿」を求めて

(1) 場面における効果的な環境の構成とはたらきかけ

前述の事例では、子どもが強い願いをもっていた。さらには、願いをもち続けたり変化させたりしながら、遊びの中で様々な試みをし、試行錯誤しながら追求することにつながっていった。昨年度からの研究により、「子どもが願いをもつ場面」と「子どもが遊びを追求していく場面」で、それぞれにふさわしい援助の在り方があるのではないかとということが浮かび上がってきている。本研究では、「願いをもつ場面」「追求する場面」の2場面それぞれにおける、有効な環境の構成と教師のはたらきかけについて明らかにしていくものである(図1)。

それぞれの場面に有効な援助は以下のように考える。

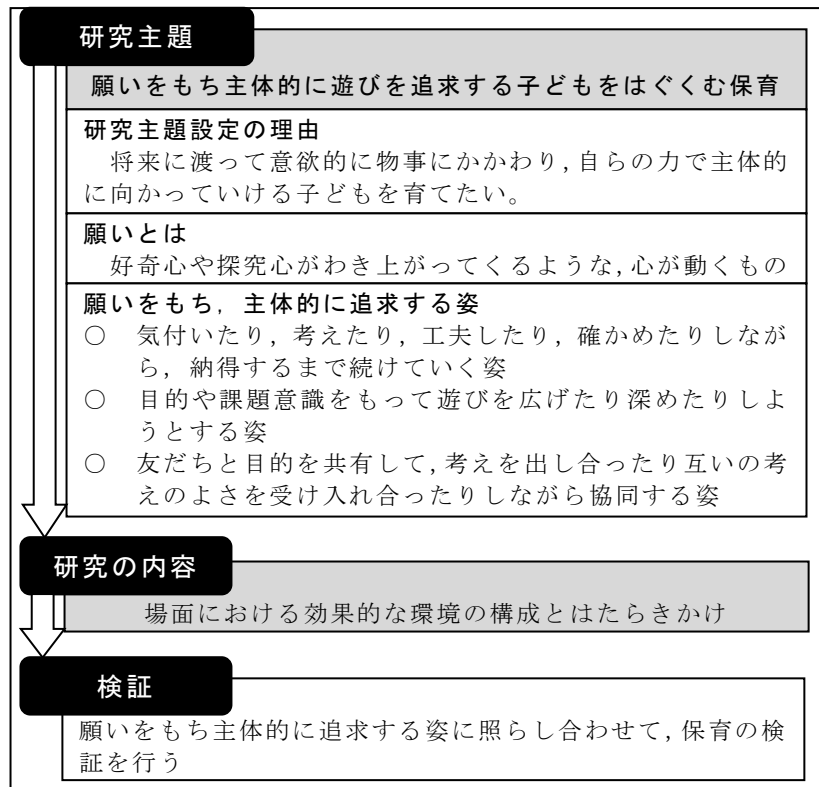


図1：研究構想図

○子どもが願いをもつ場面の援助

願いをもつ場面では、願いの明確化が有効な援助であると考え。前提として、子どもが遊ぶ場は、子どもの何を育てたいのか、そこで何を追求してほしいのかを考慮した上で設定する。遊びが始まってからは、子どもが何を感じているのか、何を願っているのかを見取り、子どもの願いが明確になるようにする。例えば、共感すること、価値付けることで、子どもの願いはよりしっかりしたものになるであろう。問いかけるはたらきかけでは、子ども自身が言葉に表すことでやりたいことがはっきりしたり気づきを促したりすることができる。と考える。

○子どもが遊びを追求する場面の援助

追求する場面では、遊びの触発が有効な援助であると考え。特に、子ども同士が関係をもてるようなきっかけをつくることで、互いに触発され、子どもたちがより遊びを追求していくのではないかと考える。友だちに認められ、自信をもって追求することや、互いの遊びのよいところを取り入れて、遊び方を変えながら追求が続くこと、新たな願いを生むことにもつながるであろう。具体的には、似たような遊びに目が向くようにする、友だちに教えてもらうように促す、みんなで考える場をもつなどはたらきかけがある。と考える。

(2) 保育の検証

それぞれの場面で、これらの援助をしたときに、子どもたちにどのような気づき生まれ、対象にどう関わっていくか、その姿をとらえ、「願いをもち、主体的に追求する姿」に照らし合わせて、保育の検証を行う。同じ問いかけるはたらきかけでも、年齢や個々の発達、遊びの種類などによって、何に焦点を当てて問いかけるかは変わってくる。実践を通して、どの場面でどのような援助が有効であるのかを明らかにしていきたい。(文責 内田 祐)